くまざさ

第 25 号
発　行
釧路湖陵同窓会
くまざさ編集委員会
発行日
平成4年3月10日
印刷所
釧路綜合印刷KK

有意義な同窓会を目指して

湖陵同窓会会長　久本　甫

昨年八月の総会で図らずも会長に選出されました。昭和三十年卒の湖陵七期です。中村隆、組村真平、長内宏各会長の下で副会長を務めさせて頂きました。これまでの会長は釧中時代を経験された方方でしたが、私は生粋の湖陵出身であります。しかし同窓会に幾度となく出席し、又役員として長らく参画しました経験から、釧中魂も多少なりとも身に付けてまいりました。同窓会の運営にあたりましては、数少なくなりました釧中出身の先輩の方々にも、十分満足して頂ける様に心掛けてまいります。丁度、質実剛健に斬新さを加えるように。

湖陵は校舎を緑ヶ岡に移転新築し、昨年八十周年を迎えました。今は大きな節目であります百周年に向けて光り輝く尾根を一歩一歩あゆんでおります。我が同窓会も一期生は三年後には八十周年を迎える事になります。母校の八十周年記念程とはいかなくとも、何か一つ考える必要があるかも知れません。

組村真平会長時代の昭和五十五年、同窓会館の建設が打ち出されて以来久しくなります。これまでの経緯は「くまざさ」で幾度か発表されておりますので省略しますが、今はっきり云える事は同窓会館建設予定地が、これまでの様に変更される事はなく、ただ実行に移すのみと云う事であります。此の件に就きましては、新役員は幸いにも前年度までの副会長以下のメンバー全員が留任致しましたので、目下、会館建設に向けその準備を進めております。釧中、湖陵同窓の皆様の御理解と絶大なる御協力をお願い申し上げる次第です。

同窓会各支部の活躍と交流も十勝はもとより道内各地とも活発になっております。一昨年は東京支部が設立されました。釧中湖陵の卒業生は、全国どこへ行っても必ずどこかの支部に属せる様な組織になるまで発展させる事が役員の使命とも考えております。いずれにしても、新卒同窓の皆様の同窓会への積極的参加をなくして、同窓会のより良き発展は考えられません。先輩、後輩が一堂に会しての楽しく且つ有意義な同窓会づくりに専念したいと考えております。

母校・同窓会に謝す

学校長　森　正徳

昨年九月二十九日のすがすがしい釧路の秋空の下で、地元釧路は勿論、札幌・東京を始めとして各地から多数の同窓生のご臨席を得て「創立八十周年・定時制七十周年並びに校舎改築落成記念式典」が挙行されました。

お陰をもちまして、式典は盛会裡のうちに無事終了することができましたが、これも同窓の方々の心からのお力添えがあったればこそと深く感謝申し上げる次第でございます。

式典を良き節目として、本校は新たな第一歩を踏み出した訳ですが、私共はいま、今後の湖陵は単に長い伝統に安座することなく、湖陵でなくてはできない何かを求めております。三月十日には第四十四期生四四〇名も湖陵から巣立って参りますが、この卒業生にもこの課題は要求されてくると思われます。

エマーソンは「全体というものは、個人の拡大された影である」と記しておりますが、これを本校に当てはめて考えれば、先輩の中に自分の影を見、後輩の中にも母校の実態を見い出し、自分自身の拡大とともに湖陵同窓生全体というより拡大された全体像が投影されていることを意味していると思います。本校の今後の躍進には、このエマーソンのことばが非常に大切だと痛感しております。

今日のこのすばらしい湖陵が存在するのも、かつて湖陵に席を置いた同窓の方々お一人お一人があったからであり、今後の本校の発展はこれらの同窓の方々の本校へのご鞭撻がぜひ必要と思うのであります。どうぞ今後とも倍旧の母校愛をお願い申し上げる次第でございます。

なお、私も本校の同窓生であり、本校に勤務し、校舎改築・八十周年式典等に直接携わることができましたことを喜びに思うと同時に誇りに感じておりますが、同窓の方々の尊いご指導があったからこそ可能であったことを思うとき、皆様方に衷心よりお礼を申し上げる次第でございます。

同窓会長退任に思う

――感謝とともに――

直前会長　長内　宏

心のふるさと－同窓会活動は正にこの言葉がぴったりである。そして理屈なしに母校－同窓生との深い繋りに熱いものを感ずる此の頃であります。

今年も又卒業式の季節となり、我が母校からも四十四期生がめでたく巣立ちゆく。卒業生諸君の新しい門出を心から祝福すると共に大成を祈念して止まない。

扨て昭和六十年の総会で組村前会長の後を受けて以来、三期六年間に亘り、同窓会長の座を穢して参りました。伝統に培われたわが同窓会、先達の残された偉業を如何に発展継承すべきか誠に荷の重さを感ずる日々でありました。幸いこの間役員の諸兄姉は勿論の事会員の皆様方より暖かな御鞭撻を戴きました。これなくして職務の遂行は一つだに不可能であり、又会長なるが故に知る得る同窓生の母校愛の数々など、今その幸せと友情の深さに唯々感涙のみであります。心より御礼を申し上げる次第です。

毎年八月の熱気に満ちた総会、その数ヶ月前から始まる当番期の準備会、深更に及ぶ役員会や会報委員会、又、教職員湖陵会や市職員湖陵会など職域の方々との交流、ふるさとを支えるこれらの人々との楽しい一時を通じて多彩で有益な多くの教訓を戴きました。

更に思い出すままに顧みると、新版同窓会名簿の発刊（昭和六十年度）は出版社の協力の下、内容を一新し多くの先輩より感謝が寄せられました。学校事務局の和田先生には大変御苦労をおかけしましたが、にもかかわらず卒後の追跡調査の難しさ、尚、未収載部分の多く今後の改訂追補が待たれる所です。同窓会発展の為には何と言っても若い期の組織づくりが肝要であり、この点一考を要するものと思います。

平成元年春には母校前庭に校歌を刻んだ記念碑を建立致しました。

遠くブラジル在住の釧中八期の相場信一氏より御寄贈のブラジル産花崗岩に不肖私が筆をとらせて戴いたものです。この実現は相場氏の同期の丹葉節郎大先輩の御尽力と、時の町田校長先生の御協力による所が大であります。これと前後して、町田校長の英断により「湖陵ギャラリー　湖陵文庫」の創設が打ち出され、多くの同窓生、元教職員の皆様より貴重な作品を御寄贈戴きました。これ又感謝にたえません。

平成二年九月には待望の新校舎が緑ヶ岡の地に完成しました。引越完了の翌日、湖陵十七期生を中心に同窓会主催の「旧校舎お別れ会－大人の湖陵祭」が催され、湖陵ヶ丘は一日中、同窓生などで賑いました。特に夕陽が紅く染まる頃、一同相集い訣別の言葉を交し、フアイヤーストームで心ゆくまで別れを惜しみました。

平成三年九月、懸案の「母校創立八十周年、校舎改築落成記念式典並びに祝賀会」が盛大に取り行われ、協賛会長として花道を飾らせて戴きました。募金活動から祝賀会終了まで協賛会役員は勿論の事、関係する多くの皆様よりの御鞭撻、そして森校長先生を中心に母校教職員の全員が一丸となって実務の分担など暖かな御協力を戴いた事は生涯忘れる事は出来ないでしょう。改めて心より御礼申し上げる次第です。

一方、この六年の間に同窓会の支部が続々と誕生、「湖陵」の連帯は全国へと拡がりつつあります。

札幌湖陵会の拡大新発足、苫小牧支部、室蘭支部の誕生、東京支部の拡大新結成など（他従来よりの十勝支部、厚岸支部、旭川有志会などあり）。

抑々釧中入学から湖陵への変革の時期に居合せた一人としてその「かけはし」としての理由を以って私は同窓会活動に押し出される事とはなりました。毎年、母校の卒業式、入学式に送り、迎える生徒諸君は未来を托するわれらの後輩であり、新世代を支える中心人物であります。新校舎の完成をみた今日、古きものは新しきものに委ねるべき時と考えました。

幸い同窓会活動に詳しい久本新会長は名実ともに会長として最も相応しく、今後は新執行部が一丸となって会の発展に御尽力を賜らん事を期すると共に母校の隆昌と同窓生御一同の御健勝御多幸と、変らぬ母校愛の発露を心より念願申し上げ感謝と共に筆を擱く次第であります。

「釧中寮歌」の紹介

北海道庁立釧路中学校寮歌を紹介いたします。

この寮歌は昭和二十八年に富士見の湖陵高校が焼失するまで、寮生に歌い継がれてきた歌です。

北海道庁立釧路中学校寮歌

作詩　菅原覚也先生
作曲　鶴見専一先生

一、北斗の直下渺茫と
　千古の森に蔭宿す
　湖陵に聳ゆる自治の塔
　栄光の燦たり我が学舎

二、睦は深し鈴蘭の
　花咲く園にまどろめば
　原始を偲ぶ斧の音
　土の香わかし蝦夷の春

三、霧立ち込むる釧路川
　筏に映ゆる篝火の
　火影おぼろに流れ行く
　水路遥けし三十里

四、夕日は映ゆる白樺の
　梢に散るや花吹雪
　永柱は銀の瓔珞か
　狂ふは嵐地の調べ

五、理想は高し阿寒山
　希望は広し太平洋
　山の幸あり海の幸
　結ぶ夢こそ圓なれ

活躍する同窓生 ②

星野之宣
（漫画家　昭和47年卒　湖陵二十四期　札幌市在住）

『四当五落の気分で呻吟』

漫画家という稼業は売れなければ食べていけないし、作品一本一本が真剣勝負ともいえる。そんなところで何とか十七年生き延びてきた。現在は講談社の「ミスター・マガジン」という隔週雑誌に連載をしているが、徹夜仕事は日常茶飯事、大袈裟にいえば四当五落の気分で毎日呻吟している。これもあのころ受験勉強を一切しなかった報いと観念するほかない。

湖陵を卒業して二十年になる。私は旧校舎に通い始めたのは昭和四十五年の春。帯広から二年生になる時点で転入してきた。担任は今も御健在の和田先生。人にうち溶けにくい性格が災いしてクラスになじむのには随分時間がかかった。知らない顔ばかりという環境に甘えて、授業をサボったり投げやりな態度で周囲には悪い印象を与えていたに違いない。数学なんぞを勉強して将来何の役に立つと、教師に噛みついたりもしていた。あの時の数学の片岡先生はすでに物故されたと聞く。恥ずかしいような申し訳ないような思い出になってしまった。そんなふて腐れ者も、いつしかクラスの明るい雰囲気に助けられて溶けこめたようだ。三年生の時には議長にまつりあげられていたのだから。

漫画家になることは確とした志望ではなかった。三年生の二学期になるまで進路も定まらず、和田先生をヤキモキさせていた。二転三転したあげく、友人が受ける予定だった美術系の公立大学を急遽便乗して受験。これが何と合格で、わけがわからないうちに画学生の仲間入り。ところが、自分が画家になる気はないということを、入学式の日に突然悟る始末。せっかくだから二年間絵の勉強をさせて貰ってから中退しようと決心して実行、上京したのは二十歳の時だった。裸一貫で自分はいったい何を始めるだろうかと思っているうちに描き始めたのが漫画で、翌年手塚賞という新人登竜門に応募して受賞。行きあたりばったりの人生である。

何とかここまでやってこれたのは、湖陵のあのクラスのおかげだったかもしれないと最近思うことがある。お世辞にもまとまりのあるクラスとは言えなかったが、変な優等生タイプも存在しなかった。ちゃんと勉強してちゃんとした大学へ進むというような常識的な規範に従う人間が一人もいなかった。みんなが好きな道を行けばいい。そういう雰囲気が私のような人間には有難かったし、その後もどこかで支えてくれてきたような気がする。行きあたりばったりとはいえ、私は好きな道を選んでこれた。

心残りといえば、大学を受けた際日程の関係で卒業式に出席できなかったことぐらいだろうか。どうも湖陵を卒業した気がしない。同級だった女子生徒のひとりは和田先生の御媒酌によって、今だに私の同級生を続けている。そして、私の書棚には何故か数ⅡBと数Ⅲの教科書が、ひっそりと並んでいるのである。

推薦のことば

湖陵高教諭
和田信幸

編集者から、〝活躍する同窓生〟を是非紹介してほしいとのことで、異色の卒業生漫画家もよかろうと、とっておき？の星野さんに原稿を依頼した次第。ついでに若干補足すると、ご本人は本校を卒業後、県立神奈川芸大（日本画科）に入学、在学中片岡球子氏（芸術院会員・日本美術院所属）に師事、中退後札幌市で活動に入る。英訳の作品も輸・出している。健康的で子供に夢を与える作風が特徴。湖陵文庫に「二〇〇一夜物語」、「ヤマタイカ」などが収蔵されている。

釧路のおみやげに！
しあわせをお菓子にのせて
蝦夷手焼せんべい 熊さき
サカエや
釧路市南大通2 ☎代41-2121

青春譜・湖陵ケ丘 《25》

釧中32期 奥田達也

集大成した
興味をもたせ価値を高めた
文をつけくわえる

湖陵八十年

待ちにまったその日。厳島神社の能舞台を破壊し、青森のりんごをふり落した百年に一度あるか無いかの台風十九号（二十九年の洞爺丸台風に酷似した大型）が北上し去って平成三年九月二十九日の日曜日は良く晴れあがった。

〝湖陵高校創立八十周年、定時制創立七十周年〟に改築落成の新校舎へぞくぞくと集う関係者たち。

私の期待は［湖陵八十年］にあった。二十冊もの要求をして。

だが、式典にも感激した。

同窓生席の最前例に座って中村隆（元同窓会長）佐久間令次（釧中十五回卒）と並んだ私は、器楽部の演奏に始まった校歌斉唱に流れ出る涙を止めることはできなかった。荘重な調べに卒業生みんなが泣いていた。こんなに感動するのは何故なのだろう。と懐しい顔を見合わせながらお互いにテレ笑いを浮べて話しあう先輩たち。

前にいる二、三年の生徒たちが歌ったようにも感激しているようにも思えなかったが。

ついで歌われた定時制校歌にも味わい深い感銘をともに抱いた。

［湖陵八十年］誌を知ったのは平成元年に図書館へ永田秀郎先生を訪れたときだった。

「写真集にしようと思ってね」と資料の数々を見せてもらったとき、思わず羨望の声を発した。十三年前に［釧中物語］を連載中、求めてやまなかった古い貴重な写真がわんさとある。

十三年の年月か？否、湖陵高校母校への愛情のあらわれでしかない。個人の力ではいかんともしがたい、青春期＝湖陵の力である。

［釧中物語］を毎日掲載するにあたっての条件に原稿用紙三枚半で顔写真三枚と角写真二枚以上といわれた。紙面で写真は窓であり、顔写真を載せることは人物名が入り、文面を具体化する。

写真の必要性はわかったが、それを集めるのは大変なこと。

室田浩志先生（北海道帯広美術館長）と寄付集めに奔走した図書館、さぞ釧中の資料がたくさん有るだろうとの考えは大間違い。

校舎火災もあり「本校の資料は余り有りません。テープも資料も校外持出しは禁止します」と赤坂忠亮先生。二度程テープを聞いただけで校舎へ伺うのはやめた。

おかげ？で先輩たちを足しげく訪れ親しくお世話になった。

有り余る写真と資料の山に羨望をかくし得なかったのはやむを得ない私の習性であったろう。約二年間、それに悩ませられつづけたのだから。

［湖陵八十年］それは期待を裏切らなかった。手にして直ぐに見た。それは期待以上に素晴らしい。

ボリュウムといい、鮮明さ、編集の心憎いまでのゆきとどいた配慮、ふんだんな写真の整理。

更に編集後記で永田秀郎がいう「写真を中心につづろうということからはじまりました。そのうち写真だけでは語りきれないということになり文をつけくわえることになったものです。

内容は時間の流れにしたがって構成しました。同時に見開きのページごとに一つのエピソードを読みとっていただけることにも配慮しました」と。

いみじくも言う「写真だけでは語りきれないので文をつけくわえた」と。写真説明だけでは当事者しか分からない。文章を読んで、ああそうなのか、ああこういうことがあったのか、その時のあの人か、こんな意味があったのか、とはじめて分かるのだ。

写真の位置づけ、語りかけるもの、意味づけが判明し、価値が高まるのだ。当事者が懐しみ愛着するだけでなく、湖陵高卒業生のみならず、万人にも興味をもたれ、資料として活用される貴重な財産

あたたかなふれあい
セオ
太陽のように
明るく暖かい真心で
良い品をより安く
ご奉仕する
セオチェーン
妹尾商店 新橋大通1丁目 ☎25－5345
新富士ストアー 新富士駅前 ☎51－3467
愛国ストアー 愛国西3丁目 ☎36－3399
白樺ストアー 白樺台1丁目 ☎91－5423
昭園ストアー 昭和北1丁目 ☎51－8853
さっぽろ地下街オーロラタウン
ギフトブティック
ペルソナ
オーロラプラザ前 ☎(011)241－3830
●味が自慢の本格派レストラン●
ステーキハウス アポロン
新橋大通1丁目妹尾商店向 ☎25－7023
営業時間／AM11:00～PM9:00

資料を整理し

永田・和田が万人に

写真だけで不足と

となった。

せっかくに集まった大切な資料が新校舎の図書館に長く保管される。その集大成が、この誌だ。

誌の部数二千余は少ない。増刷はしたが少ない。在校生一千五百人にもわたした。在学時代に校歌を唄わなかった者も、いつかは「なぜだか涙が出てきた」と唄うに違いなく、誌への愛着がわくはずである。買い上げるなど、奪い取ることはすまい。

貴重な素晴らしい誌が貰えず、購入もできない人たちへ渡しているうちに私の保存誌も危うくなってきた。更に増刷が[illegible]と承知して、私は［ザ・東北海道］誌に、〝釧中・湖陵高の八十年〟を五回にわたって連載を今年四月から始めると決意した。

遠藤利雄主幹も承諾してくれた。

一回目の「明治・大正篇」だけでも学校創立までしか書き切れなかった。写真は八十周年記念式典や祝賀会、それに［湖陵八十年］の豊富な資料を積極的な学校側の協力を得て載せた。

二回目以降も校風刷新事件、釧中ストの第一、第二、湖陵留任運動などなど事件やエピソードを写真もふんだんに載せ、纏められた資料を丹念に積み重ねて、湖陵高校の表と裏を描き、表裏一体としての歴史を書き綴るつもりである。

本校の記念誌はいく冊も発刊され、卒業生各自の記録も上梓された。それぞれが関係者の思い出を誘い、興味をひいている。

だが［湖陵八十年］は各自の思い出話を出来る限り制約し、歴史的な網らをもつともとした。しかも史実を丹念に深く掘り下げた。

そこにこの誌の有効必携な価値がある。

〝青春譜・湖陵ヶ丘〟と題し連載二十五回目を迎えて今、この誌に出会うことができ、我が身の幸せをしみじみと感じている。

和田信幸先生が〝湖陵〟に長くかかわってきて誌の編集メンバーとして活躍されたのは配列にみじんの不安を与えないことからもうかがいしれる。

資料の蒐集・保管は本当に大切だ。気のゆるみを許さない。あっと思ったら失なわれ、二度とお目にはかかれない。

故佐藤慶二先生が、数度の来釧の折、栄屋旅館（釧中二十回卒故田巻一雄、湖陵十八回卒田巻恒利経営）で［釧中物語］について、「生徒ばかりで教師が余り描かれておらん」と長々と苦情を話されたことがあった。

書き始めた頃、故札木照一郎をとおして褒美に蝦夷紀行図譜をあげる、といわれたものだから、いい気になっていた。うかつに、そのまま物語をつづけていたばっかりに、〝寮歌〟の作詞家（故菅原覚也先生）を探し出すのに、平成元年えらく苦労したものである。

連載の執筆中であれば［湖陵同窓会報］創刊号（昭和三十四年七月二十三日発行）の本人が寄稿された〝湖陵に拾う＝わがあしあと〟『日出づる国の北垂に』という校歌と『北斗の直下ぴょうぼうと』の寮歌を作ったことは、感懐深い我が足跡である。（本行寺住職、元釧中教諭）から寮歌について記録し掲載もし[illegible]もしていたはずであった。

応援歌の作詞作曲にしても、出来た年が分かっているのだから、当時在学の卒業生に質問しておれば解明したものである。今頃になって釧中二十回生の音楽部員に尋ねても、訳を知るはずの人は亡く、杜絶えてしまう。

まことに蒐集にはチャンスがある。また長い年月と執念がいる。

たかが切抜とおっくうがったばっかりに原本を失い、記憶のあてのなさに苦労する毎日。創作であれ、真実の土台がしっかりしておらなければ、すべてが浮わついた借りものとなり、書く自信も失われるのである。

その点、この誌は編集者たちの文章を極力排し、史実や記録を巧みに組み立てて生かし、歴史の真実を描き出している。

これ程に資料や写真を網らして、見開きのページごとに纏め上げた伎倆、力量は恐るべきものがある。いかに材料が豊富に集まってきたからとはいえ、限られた予算と時間とで、これ程まで見事な誌を作られ、発刊されたことに敬意を表する。誠に私にとって有難い財産となる本である。

御婚礼・御宴会・御会合・御宿泊

政府登録国際観光ホテル・日本ホテル協会会員

釧路パシフィックホテル

中村　隆（釧中27期）

釧路市栄町2丁目6番地 ☎24-8811

れんが屋★AM11:00～PM11:00

トロイカ★AM 8:00～PM11:00

パシフィックイン・八まき・八宝園

学窓を巣立つにあたって

松永　仁子

卒業を目前に控えた高校三年生－この言葉から私がまず思い出す歌といえば、やはり、舟木一夫の『高校三年生』でしょう。「僕ら離れ離れになろうともクラス仲間はいつまでも～」という例の歌ですが、その歌詞の通り、高校時代を共に過ごした友達と離れるのは非常につらいことです。私は小学校も中学校も途中で何度か転校し、また、もともと物覚えが悪いので、他のクラスの人の名前を覚えるということはまれなことでした。しかし高校時代は転校することもなく、部活動などで他のクラスの人達とも知り合う機会が多くあったため、「クラス仲間はいつまでも～」とするより「同期仲間はいつまでも～」として歌った方が、私にはしっくりくるような気がします。

この同期生のことを「代」といわせていただきますが、私達の代の特徴としてまずあげられるのは、素晴らしいエンターティメント性を持っている人材が多い、ということでしょう。新入生歓迎会、湖陵祭など。特に紅白歌合戦で各クラスがこぞって花形エンターティナーを送り出し、熾烈な争いを繰り広げたことは、みなさんの御記憶に新しいことと思います。また次にあげられる特徴として、歴代の三年生に比べて平均学力が低いということです。私達に御指導下さった先生方は、このことに少なからず頭をお悩ませになったのではないかと思いますが、最後まで本当に熱心に御指導下さいました。しかし私は、このちょっと悪い頭と素晴らしいエンターテイメント性こそが、新しい湖陵の一面－親しみやすい湖陵というイメージを産むのに一役も二役も買ったのではないかと思っています。確かに数々のエリートを育て、送り出した湖陵高校の伝統からみると、私達の存在は異端児的存在だったかもしれません。しかしエリート校がエリートばかり送り出していたからとて、進化または進歩するわけではありません。時には異端児的存在の突然変異体を送り出してこそ進化していくのではないでしょうか。

そういうわけで、私はこの湖陵高校に愛着を感じると同時に、私達の代にも強い愛着を感じ、その「代」に私が存在できたことを少し誇りに思っています。

最後になりましたが、この湖陵高校に入学してから今まで、色々な面で御指導下さった先生方、事務の方々や用務員のおじさん達、また知らない所で支えて下さった方々、物でのお礼はできませんので、言葉でお礼させていただきます。本当にありがとうございました。

春名　真仁

大きな志を胸に抱き、湖陵ヶ丘に立つ旧校舎に入学してから早やくも三年の月日を数えます。毎朝出世坂を登り、丸い時計のある古びた校舎に通っていたのがつい先日のように感じられます。

入学した当初は、[illegible]育館も飛び交う鳩や、火災報知器のようなベルの音、ぎしぎしときしむ暗くて狭い廊下、雨もりなど驚くものばかりでした。冬には、唯一の暖房である古びた石炭ストーブが隙間風の吹きこむ教室の冷たい空気を和らげてくれました。休み時間のたびにストーブの周りには雑談する人の壁ができたものでした。

最初は不慣れだった高校生活も新しい友達ができてくると、学校に来る毎日が次第に充実したものとなりました。勉学にはもちろん部活にも積極的に参加し、文武両道という湖陵精神のもとで学問以外にも貴重な経験を得ることができました。

いつもは静かな中庭も湖陵祭が近づくと行灯製作の場として活気溢れるものとなり、徐々に湧き上がる期待と興奮は行灯行列や紅白で最高潮に達しました。そして統一したTシャツを着て各競技に臨んだ体育祭や友達と生活を共にした修学旅行を通じて、クラス全体が一つになる喜びを知りました。

僕達は、高校生活の約半分を今はない旧校[illegible]学びそして残りを緑ヶ岡の新校舎で過ごしました。大きな時計塔など近代的な外観の新校舎は、旧校舎にはなかった新しい設備が各所に備え付けられ、暖房も立派なものとなり、冬でも快適に授業を受けられるようになりました。しかし灰捨て作業や鳩の糞害、冬の寒さなど辛い事もたくさんありましたがいざ旧校舎が壊されるとなるとやはり寂しいものでした。また、三年生最後の湖陵祭で諸事情のために行灯行列が実施されなかったことは、とても残念に思います。ですから後輩達には、湖陵の伝統を受け継ぎ、守るためにも困難をのりきってぜひ行灯行列を復活させてもらいたいと期待しています。

実りある三年間を自由な校風の中で過ごすことができたこと、そして数々の貴重な経験を通し、熱心な先生方、多くの友人達と出会うことができたことは、これからの生活の中において大きな糧となることでしょう。

最後になりますが、新校舎落成という湖陵の新たな歴史の出発点に僕達が立ち会ったことを光栄に思うと共に、更なる湖陵の発展を祈念します。

「学園だより'91」・母校の活動

同窓生の皆さまいかがお過ごしですか。〝くまざさ〟25号の発行にあたり、母校のこの一年を概略振り返ってみたいと思います。

〈四月〉

・新年度スタート（8日、始業式）。古谷脩教頭以下10名の新任教職員を迎える（全日制）。

・入学式（8日、448名）。

・宿泊研修（18日～20日、1年生、川湯・御園ホテルにて）。

〈五月〉

・教育実習（20日～6/1日、16名）。

・高体連テニス支部大会当番業務（28日～30日）。

〈六月〉

・高体連弓道支部大会当番業務（1日）。

・高体連全道大会に各部出場（陸上、新体操、テニス、軟式テニス、羽根球、弓道、柔道、卓球、登山、バスケットボール、ハンドボール、サッカーなど12クラブ）。このうち、ハンドボール女子が2回目の全道制覇（全国大会へ）。

〈七月〉

・夏期進学講座（24日～8/4日、3年生、3教科延べ612名受講）。

〈八月〉

・ハンドボール女子高体連全国大会に出場（1日～5日、清水市、2回目、2回戦）。

・学校プール、道教員採用試験で初使用（6日～8日、今年度から本校が試験会場となる）。

・国体道予選に（6月～8月）、弓道、サッカー、軟式テニス、羽根球、ハンドボール、バレーボール、陸上、卓球が出場。

・第41回湖陵祭、新校舎で初めての実施（23日～26日、行灯行列は交通事情等で今回は中止）。

〈九月〉

・創立80周年・改築記念式典を挙行（29日、参列者1、330名、午後キャッスルホテルにて祝賀会）協賛募金約5、000万円、事業の一つとして、記念写真誌を発刊、2、700部。今回の事業遂行に当たり、協賛会を中心に同窓会にも大変お世話になりました。

創立80周年・改築記念式典（H3.9.29）

〈十月〉

・高文連理科支部大会当番業務（7日）。

・選抜・新人戦道大会に（9月～平成1/1月）、テニス、軟式テニス、陸上、弓道、柔道、バスケットボール、ハンドボール、羽根球の各部が出場。ハンドボール女子、北・北海道代表権を獲得（5回目、3月名古屋での全国大会に出場予定）。

・高文連全道大会に（6月～11月）、放送、新聞、合唱、器楽、考古学、美術（優秀賞3名）、書道（優秀賞3名）、図書、写真、理科（総合賞）、演劇（優良賞）が参加。合唱部は最優秀賞を得、8月那覇市での全国大会に出場予定。また、読書体験コンクールで菊地もえ子さん（2年）が〝火垂るの墓〟を読んで〝で優秀賞を受賞。

・見学旅行（25日～30日、2年生、東京・京都・奈良方面）。

〈十二月〉

・L・L教室（語学演習室）完成（器機、工事費1、200万円）。

・高体連スケート全道大会で、アイスホッケー部ベスト8、フィギュアでは小杉陽子さん（2年）が全道大会連覇（国体も）。各々全国大会へ。

・第29回有島青少年文芸賞で、昨年の渡辺聖子さんに続いて吉原明日香さん（2年）が優秀賞を受賞（詩「葭揺れる季節」で）。

・3年生特別午前授業（11日～1/31日）。

〈一月〉

・大学センターテスト（11・12日、受験者215名）。

・高体連スケート全国大会で（18日～24日、日光市）、アイスホッケー部3位、31年ぶりベスト4）、フィギュアの小杉さんは9位（国体8位）。

〈三月〉

・高校入試（4日）及び入試業務（定員445名、応募数496名、3/4日現在・含理数科）。

・第44回卒業式（10日、卒業生440名、卒業生総数20、475名）。

以上手短かに概略を記しましたが、学校の動きが少しでもご理解いただけたかと思います。今年度も創立80周年・改築記念行事への取り組みを中心に、多忙な一年が経過しました。同窓生の皆さま、今後とも母校のため、後輩のためよろしくお願いいたします。

〈文責・湖陵4期・和田信幸〉

＝道新スポーツ提供（日光市にて）＝

平成3年3月卒業生進路状況

	性別計	卒業者	希望者就職	希望者進学	合格者 大学 国立	公立	私立	計	準大学	短大	各専種修	合計	（含不明）不合格
3年3月卒	男	253	7	246	67	10	64	141	3	0	13	16	87
	女	183	10	173	32	6	29	67	0	66	16	82	24
	計	436	17	419	99	16	93	208	3	66	29	98	111
	%		3.9	96.1	22.7	3.7	21.3	47.7	0.6	15.1	6.7	22.5	25.5

『同窓会副産物に感謝、感謝』

19期　**袖中居　広　志**

ある日、突然、湖陵の先輩であり職場の上司でもあるA氏から「今年の同窓会は、お前たち19期が幹事だぞ。明日、合同幹事会があるので出てこい」という有無を言わさぬ誘いであった。申し訳ない話であるが、それまで一度も同窓会に出席したことのない私にとって、何のことか要領を得ないまま「懐かしい同期生と久しぶりに会えるな」と、軽い気持ちで合同幹事会とやらに出席した。幹事の役割分担などの説明を受けながら、居並ぶ大先輩を前にして、軽い気持ちなど一遍に消し飛んでしまい、まさに『ヘビに睨まれたカエル』よろしく、ただただ「ハイ、ハイ」と返事を繰り返すのみであった。

しかし、やらなければならない。やるからには、他の期には負けられない。19期の力の見せ所とばかりに、早速市内在住の同期生と連絡を取り合い、かくして第一回目の会合を持つに至った。参加者は30余名。実に懐かしい面々である。生まれた時から、所謂「ベビーブーム」の荒波にもまれ、青春時代を学生運動の真っ只中で過ごし、そして、今「団塊の世代」と呼ばれるおじさんおばさん達である。『楽しかった。来年も出よう』という同窓会にすることを最大目標に、寄付集め、会券の販売、余興、当日の会場係などきめ細かく任務を分担した。それぞれが、各職場においては業務の中心的役割を果たす立場にあり、また家庭においては所謂「いちご世代」の親として多忙極める中、精力的に行動した。おかげで、寄付集め、会券の販売とも、大幅に予定を上回ることができた。余興は、参加者全員が盛り上がるものということで、『ウルトラクイズ』に決定した。問題作りや早押し判定の電機の製作、賞品の選定等々、当初の想像をはるかに越える作業であった。かくして、同窓会当日を迎えた。入念な『リハーサル』を行ない、万全を期して望む予定であったが、会場の確保が侭ならず、結局ぶっつけ本番でのスタートとなった。参加者の動向、クイズ参加券の売れ行きなど、緊張しながら受付と会場を行ったり来たり。ここで、最初のハプニングが発生した。参加者が予定数を越えたため、席が足りなくなったのである。自主的に19期全員が起立し、事なきをえた。さて、いよいよメインの『ウルトラクイズ』。第一問がスタート。ここで、二番目のハプニングである。なんと「答えが違う」という大先輩からのクレームである。縷々説明を受け、あらためて湖陵の歴史を実感しながら、司会者の機転で何とかクリアーできた。結果的に、このことが起爆剤となり、一気に盛り上がった。大成功である。同窓会も無事終了し、笑顔で帰って行く先輩、後輩の姿を見、ホッとした気持ちであった。懐かしの学舎を巣立って24年。湖陵高校創立80周年という記念すべき年に、19期一同微力ではありましたが、同窓会幹事として恩返しが出来たことを大変うれしく思います。余談ですが、当番幹事として何回か会合を重ねましたが、いずれも30名を越える参加となり、19期の結束力の強さを垣間見ることができました。ところが、実は19期としての同期会がないことに気付きました。これは好機とばかりに、早速、島本幸一氏を会長に結成の運びとなり、同窓会終了後、同期会を開催いたしました。道内外から50余名の参加があり、定期的な開催を決めました。当番幹事の副産物としての大きな贈り物に深く感謝申し上げます。

湖陵同窓会新役員名簿

会長　久本甫（7期）　**副会長**　遠藤隆吉（4期）本間秀一（6期）吉井正（6期）原轟戸（7期）　**幹事長**　関口政司（10期）　**副幹事長**　沢田征矢（13期）鈴木豊治（16期）宮本英司（17期）勇順子（17期）　**会計長**　山本寿福（8期）　**会計**　佐藤文昭（22期）　**会計監査**　坂上洋治（3期）割方道子（3期）神鉴躬（8期）

事務局だより

同窓会会員の皆様には常日頃から同窓会活動に対しご支援、ご協力を賜わり衷心より厚くお礼申し上げます。昨年の八月には九期・十九期・二十九期の当番幹事期の皆様のご協力のもとに盛大に総会を終らせて頂きました。ほんとうにありがとうございました。また九月には新校舎落成並びに開校八十年式典が盛大に挙行され新しい歴史の一ページが開かれたといっても決して過言ではありません。古き良き伝統をいつまでも大切にすると同時にさらにそれを継承しなければなりません。そういう意味におきましても毎年新しい同窓生が増えてくる訳であります。どうか新しい同窓生の若い英知を結集してどしどし事務局の方へ参考のご意見、そして寄稿くださるよう期待致しております。いまや同窓会の活動は東京始め道内主要都市でも活発に行われております。現同窓会としてもハッパをかけられないよう頑張らなければならないと思っておりますが何んと申しましても会員の皆様のご協力が何より重要と考えますので今後ともよろしくお願い申し上げます。

新しい校舎が出来ました次は新校舎建設のため一時中断されていた同窓会館を建てる番でございます。同窓生が、そして在校生が心をひとつにして憩える場所、そのような同窓会館を造りたいと思っております。しかし、これから建設にあたっての具体的な取り組み作業に入って行くわけでございます。そのためには前にも述べましたように同窓生一人一人のご協力なくして決して完成出来得るものではありません。役員一同これからは会館建設に向けて誠心誠意努力致す所存でございます。どうか会員の皆々様の絶大なるご支援を心からお願い申し上げ事務局からの便りにさせて頂きます。

関口記

◆編集後記◆

「くまざさ」第25号は、多くの同窓の皆様の協力で完成しました。今後共、宣しくお願いします。

編集委員

久本　甫
遠藤　隆吉
関口　政司
上岡　信明
吉井　正
平野清次郎
石川　和男